

タタール語の関係節における主語人称標示

菱山 湧人

Subject person markings in Tatar relative clauses

Yuto HISHIYAMA

Abstract

Tatar relative clauses have three main structures that indicate the subject person.

H-POSS type	Subject person is expressed by a possessive suffix on the head noun.
S-GEN H(-POSS) type	Subject person is expressed by a genitive noun or pronoun and a possessive suffix on the head noun (optional in first or second person).
S-NOM H type	Subject person is expressed by a nominative noun or pronoun.

H-POSS type, which does not have an explicit subject noun phrase, is considered to appear under conditions where there is no need to state the subject noun phrase. The purpose of this paper is to clarify the distribution of the remaining two structures with the subject noun phrase in the clause and the frequency of occurrence of the possessive suffixes in S-GEN H(-POSS) type. As a result of the investigation, the following two points were clarified.

- 1) In Tatar relative clauses, S-NOM H type structures are more common.
- 2) In S-GEN H(-POSS) type structures, the frequency of the first person plural possessive suffix is the lowest as in the case of possessive noun phrases.

With regard to these results, the author asserts the followings:

- a. 1) is consistent with the description in Schönig (1997: 266).
- b. From 2), it can be said that when the referent of the genitive pronoun is plural, the frequency of possessive suffixes tends to be low in Tatar.



目次

0. はじめに

1. 先行研究

- 1.1. Xisamova (2006)
- 1.2. Ersen-Rasch (2009)
- 1.3. Schönig (1997)
- 1.4. 問題提起

2. 調査

- 2.1. 調査方法
- 2.2. 調査結果

2.2.1. S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型

2.2.2. S-GEN H(-POSS) 型における所属人称接辞

3. 考察

3.1. S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型

3.2. S-GEN H(-POSS) 型における所属人称接辞

4. 今後の課題

略号一覧

参考文献

調査資料

0. はじめに

タタール語ⁱの関係節ⁱⁱは、主語人称を標示する以下の3通りの主な構造を持つ。

H-POSS 型	主要部名詞に付く所属人称接辞によって表す。
S-GEN H(-POSS) 型	属格の名詞または代名詞と、主要部名詞に付く所属人称接辞（一・二人称では現れないこともある）によって表す。
S-NOM H 型	主格の名詞または代名詞によって表す。

明示的な主語名詞句を持たない H-POSS 型は、語用論的に主語名詞句を述べる必要がないような条件下で出現すると考えられる。本稿の目的は、節内に主語名詞句を持つ残りの2つの構造の分布と、S-GEN H(-POSS) 型における所属人称接辞の出現頻度を明らかにすることである。調査の結果、以下の二点が明らかになった。

- 1) タタール語の関係節では全体的に S-NOM H 型の構造の方が一般的であること。
- 2) S-GEN H(-POSS) 型の構造における所属人称接辞の出現頻度は、所有名詞句ⁱⁱⁱ一般と同様に一人

称複数が最も低いこと。

筆者はこれらの結果に関し、以下の二点を主張する。

- a. 1) が Schönig (1997: 266) の記述と一致すること。
- b. 2) から、タタール語では属格人称代名詞の指示対象が複数である場合に所属人称接辞の出現頻度が低い傾向があること。

本稿の構成は次の通りである。まず第1節で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。第2節で調査方法と調査結果、第3節で考察、第4節で結論と今後の課題を述べる。

なお、本稿における例文番号、日本語訳、グロス、文字飾り^{iv}、外国語文献の翻訳、ラテン文字転写^vは筆者による。出典記載のない例文は、第2節で述べるコーパスから得られたものである。

1. 先行研究

本節では、タタール語の関係節やチュルク諸語の関係節全般に関する先行研究の記述をまとめ、問題点を挙げる。1.1 節で Xisamova (2006)、1.2 節で Ersen-Rasch (2009)、1.3 節で Schönig (1997) の記述をまとめ、1.4 節で先行研究の問題点を挙げる。

1.1. Xisamova (2006)

まず、タタール語の形態論に関する先行研究である Xisamova (2006) の、形動詞に関する記述をまとめる。以下、1) 形動詞形成接辞、2) 統語的機能、3) 主語人称標示法の順に述べる。

1) 形動詞形成接辞

Xisamova (2006) は、標準タタール語では6つの形動詞が使われているとし、それらを過去・現在・未来の三つに分類している^{vi}。表1に、それぞれの形動詞の形式と機能をまとめる。

2) 統語的機能

Xisamova (2006: 227-229) は、タタール語の形動詞の機能として修飾機能と動名詞的機能^xがあるとし、以下のような例を挙げている。

修飾機能

- (1) [Äyt-kän] süz
言う-PTCP.PST 言葉
[at-qan] uq.
撃つ-PTCP.PST 矢
「言った言葉は放った矢（と同じ）だ。」

(Xisamova 2006: 227)

動名詞的機能

- (2) [Sin kil-gän]-ne köt-ep,
2SG 来る-PTCP.PST-ACC 待つ-CVB
bar-miyča tor-dī-m.
行く-NEG.CVB いる-PST-1SG
「私は君が来るのを待って、行かないでいた。」
(Xisamova 2006: 229)

Xisamova (2006) は、形動詞が修飾語として機能する場合、形動詞は自身の表す状態・動作の主語・目的語・場所・時間を表す名詞を修飾する^xとし、以下の例を挙げている。

- (3) [uqı-yan] {keşe / kitap / mäktäp / yıl-lar}
読む-PTCP.PST {人 / 本 / 学校 / 年-PL}
「読んだ人／読んだ本／学んだ学校／学んだ年」
(Xisamova 2006: 228)

3) 主語人称標示法

被修飾語が形動詞の表す状態・動作の行われる対象・場所・時間を表す場合、形動詞の主語を表す方法として Xisamova (2006) は以下の三つを挙げている。

表1：タタール語の形動詞とその機能

	名称 ^{vii}	形態	機能
過去	-yan 形	-yan / -gän, -qan / -kän	過去時制。主動詞よりも前に完了した状態・動作や、同時に起こる状態・動作を表す。
現在	-uwčir 形	-uwčir / -üwče -wčir / -wče	時制に関係なく名詞の持つ特性を表すことが多い。主動詞と同時に起こる状態・動作や、前に完了した状態・動作を表す。
	-a toryan ^{viii} 形	-{a / -ä} toryan -{iy / -iy} toryan	時制に関係なく名詞の持つ特性を表すことが多い。稀に発話時点に行われる状態・動作を表す。
未来	-ir / -er 形	-ir / -er, -ar / -är -r	現在・未来時制。発話時点に行われることや未来に行われる動作・状態を表す。否定形は -mas / -mäs。
	-asi 形	-asi / -äse -iyisi / -iyise	未来時制。発話時点よりも後に起こる動作・状態を表す。義務・必要のモダリティを含む。否定形は使われない。
	-açaq 形	-açaq / -äčäk -yaçaq / -yäčäk	未来時制。未来に確実に起こる状態・動作を表す。

(Xisamova 2006: 226-256 をもとに筆者が作成)

a. 被修飾語に付く所属人称接辞によって表す方法

- (4) [Söylä-yäčäk] süz-lär-eŋ-ne
 話す-PTCP.FUTIII 言葉-PL-2SG.POSS-ACC
 is-eŋ-dä tot.
 記憶-2SG.POSS-LOC 持つ-IMP.2SG
 「君は自分の話す言葉を覚えておけ。」

(Xisamova 2006: 251)

b. 属格の名詞または代名詞と被修飾語に付く所属人称接辞によって表す方法

- (5) Ah, [minem sayra-r]
 ああ 1SG.GEN 鳴く-PTCP.FUTI
ĵir-em urman ide.
 場所-1SG.POSS 森 COP.PST
 「ああ、私が鳴く場所は森だったのだ。」

(Xisamova 2006: 244)

c. 主格の名詞または代名詞によって表す方法

- (6) [Min tor-a tor-yan] šähär-neŋ
 1SG 住む-PTCP.PRSII 街-GEN
 urta-sın-da bazar bul-ïp...
 真ん中-3SG.POSS-LOC 市場 ある-CVB
 「私が住んでいる街の真ん中に市場があって…」

(Xisamova 2006: 256)

1.2. Ersen-Rasch (2009)

ドイツ語で書かれたタタール語の学習書である Ersen-Rasch (2009) は、形動詞の特別な用法に関する項目で、「関係節の主語を属格にし、主要部名詞に所属人称接辞を付すことも可能である。この場合主語は、既知のものや既に述べられたもの（テーマ）を表す」(Ersen-Rasch 2009: 142) と述べ、以下の例を挙げている。

- (7) Min elek iske ber yort-ta tor-a
 1SG 以前 古い 一 家-LOC 住む-PRS

- ide-m. [(Minem) Tor-yan]
 COP.PST-1SG 1SG.GEN 住む-PTCP.PST
yort-ïm ike qatli ide.
 家-1SG.POSS 二 階建て COP.PST
 「私は以前、古い家に住んでいた。私が住んでいた家は二階建てだった。」

さらに、指摘しておくべき構造として Ersen-Rasch (2009) は以下の例を挙げている。

- (8) a. [Yeget taši-yan] suw
 青年 運ぶ-PTCP.PST 水
 čišmä-dän ide.
 泉-ABL COP.PST
 ‘Das Wasser, das **ein** junger Mann getragen hat, war aus der Quelle.’
 「ある青年の運んだ水は泉からだった。」
- b. [Yeget-neŋ taši-yan] suw-ï
 青年-GEN 運ぶ-PTCP.PST 水-3SG.POSS
 čišmä-dän ide.
 泉-ABL COP.PST
 ‘Das Wasser, das **der** junger Mann getragen hat, war aus der Quelle.’
 「その青年の運んだ水は泉からだった。」

(Ersen-Rasch 2009: 142)

- (9) a. [Alsuw al-yan] kitap-nï
 PN 買う-PTCP.PST 本-ACC
 uqï-dï-m.
 読む-PST-1SG
 ‘Das Buch, das Alsu gekauft hat, habe ich gelesen.’
 「アルスーが買った本を私は読んだ。」
- b. [Alsuw-nïŋ al-yan] kitab-ï-n
 PN-GEN 買う-PTCP.PST 本-3SG.POSS-ACC
 uqï-dï-m.
 読む-PST-1SG

‘Das Buch, das Alsu gekauft hat (**und ihr gehört**), habe ich gelesen.’

「アルスーが買った（彼女のものである）本を私は読んだ。」

(Ersen-Rasch 2009: 142)

Ersen-Rasch (2009: 142) によると、(8) において関係節の主語 *yeget* 「青年」は、主格で現れる (8)a では不定、属格で現れる (8)b では定であるという。一方、固有名詞なので当然「定」である *Alsuw* 「アルスー」が主語である (9) において、属格で現れる (9)b では、アルスーが本の持ち主でもあると解釈されるという。

1.3. Schönig (1997)

チュルク諸語の分類に関する先行研究である Schönig (1997) は、チュルク諸語の関係節（主要部名詞が関係節の主語と同一でないもの）における標示法 (marking strategies) について記述している。Schönig (1997: 266) によると、中央アジア西部の言語（ウズベク語・カザフ語・トルクメン語）などは、主要部名詞につく所有人称標識が関係節の主語を表す構造^{xi}を規則的に用いる一方で、「極西」の言語（チュヴァシ語、ヴォルガ・ウラル・コーカサスのキプチャク系言語^{xii}）と、「極東」の言語（ウイグル語やイエニセイ川流域の言語など）はこのような構造を規則的に用いず、主要部名詞にも形動詞にも所有人称標識が付かないタイプの構造^{xiii}を用いるという。

1.4. 問題提起

Xisamova (2006) では、被修飾名詞が節の主語以外である場合に関係節の主語を表す3つの方法（H-POSS型、S-GEN H-POSS型、S-NOM H型）が挙げられている。しかし、筆者の観察では以下のように、形動詞の主語が一・二人称である場合、それが属格人称代名詞によってのみ表される（被修飾名詞に所属人称接辞が付かない）構造（S-GEN H型）も見られる。

- (10) Ä menä xäzer [**minem**
そして さあ 今 1SG
yarat-qan] jür-ni tñgla-p qara-yüz.
好む-PTCP.PST 歌-ACC 聞く-CVB 見る-IMP.2PL
「さて今度は私の好きな歌を聞いてみてください。」

さらに、形動詞の主語が主格名詞句と被修飾名詞に付く所属人称接辞によって表される構造（S-NOM H-POSS 型）の例も見られる。しかし、筆者の観察ではこのような構造を持つ例は非常に稀であるため、タタール語の関係節で主語を表す主な方法には含めないこととする。

- (11) [**Bez** kičer-gän] čor-ibüz
1PL 過ごす -PTCP.PST 時代 -1PL.POSS
öčen bu bik
にとって これ とても
tabiiy xäl ide.
自然な 状態 COP.PST
「私たちが過ごした時代にとってこれはとても自然なことだった。」

以上を踏まえると、タタール語の関係節で主語を表す主な方法は以下の3つであるといえる。

H-POSS 型	主要部名詞に付く所属人称接辞によって表す方法
S-GEN H(-POSS) 型	属格の名詞または代名詞と、主要部名詞に付く所属人称接辞（一・二人称では現れないこともある）によって表す方
S-NOM H 型	主格の名詞または代名詞によって表す方法

明示的な主語名詞句を持たない H-POSS 型は、主に語用論的に主語名詞句を改めて述べる必要がないような条件下で出現すると考えられる。節内に主語名詞句を

持つ残りの2つの構造の分布に関して、Ersen-Rasch (2009: 142) は、属格主語が旧情報を表すと述べている。さらに、主格主語が不定、属格主語が定の主語を表す例 (8) や、属格主語が主要部名詞の所有者であると解釈される例 (9) を挙げている。しかし筆者の観察では、以下のように不定の主語が属格で現れている例 (12)、定の主語が主格で現れている例 (13)、定の主語の属格形が現れていても主要部名詞との間に所有関係が成り立たない例 (14) も見られる。よって、どちらの主語人称標示法が用いられるは情報構造のみでは説明できない。

- (12) Bu, nigezdä, [ar xalq-ın-nan
これ 基本的に ウドムルト 民族-3SG.POSS-ABL
ber törkem-neñ urnaş-qan]
ある 集団-GEN 定住する -PTCP.PST
awıl-ı bul-yan.
村 -3SG.POSS である -PRF
「これは基本的に、ウドムルト民族のある集団が定住した村であった。」

- (13) [Bu uquw yort-ı
この 学ぶ 家-3SG.POSS
urnaş-qan] urın-da
位置する -PTCP.PST 場所-LOC
elek bala-lar-nıñ xezmät
以前 子供-PL-GEN 労働
kolonija-se bul-yan.
収容所-3SG.POSS ある -PRF
「この学校が位置する場所にはかつて、子どもたちの労働収容所があった。」

- (14) [Wäzir Isxaq-nıñ saray-da
大臣 PN-GEN 宮殿-LOC
ıñ qurq-qan] keşe-se
最も 恐れる -PTCP.PST 人-3SG.POSS
xanbikä Zöbärjät.
妃 PN

「イスハク大臣が宮殿で最も恐れている人は、妃のゾベルジェットだ。」

Schönig (1997) の記述は、タタール語の関係節では S-NOM H 型が一般的であることを示唆しているが、定量的な調査を行った上での記述ではない。さらに、S-GEN H(-POSS) 型の構造における所属人称接辞の有無に着目して記述した先行研究は管見の限りでは見当たらない。

以上の問題点を踏まえ、本稿では詳細な調査を行い、S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型の分布と、S-GEN H(-POSS) 型における所属人称接辞の出現頻度を明らかにすることを目的とする^{xiv}。

2. 調査

本節では、2.1 節で調査調査方法、2.2 節で調査結果について述べる。

2.1. 調査方法

コーパス調査とインフォーマント調査を行う。コーパス調査では、タタール語のオンラインコーパス Corpus of Written Tatar (CWT)^{xv} を用いる。調査対象とする関係節は、形動詞を述部とし主要部名詞を持つ関係節とする。理由は、これが最も多くの用例数が得られる典型的な関係節であるからである。具体的な検索方法等は 2.2 節で述べる。インフォーマント調査では、筆者が作成した例文をインフォーマント^{xvi} に提示し、「容認可能」、「違和感がある」、「容認不可」のいずれかを選んでもらう形で容認度を調べる。

2.2. 調査結果

本節では、コーパス調査およびインフォーマント調査の結果について述べる。2.2.1 節で主格主語と属格主語、2.2.2 節で所属人称接辞の有無について述べる。なお、本節では調査結果を提示するにとどめ、考察に

については第3節で行うものとする。

2.2.1. S-NOM H 型とS-GEN H(-POSS) 型

本節では、S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型の分布に関して行った調査の結果を述べる。調査の結果、タタール語の関係節では全体的に S-NOM H 型の方が一般的である（ただし、*yarat-qan*, *söy-gän* 「好きな」や未来の形動詞 *-ir* 形が述部である場合は S-GEN H(-POSS) 型の方が一般的である）ことが分かった。

まず、S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型の全体的な出現頻度を調査するために行ったコーパス調査の方法と結果について述べる。調査方法は以下の通りである。

一・二人称主語

- ① 一つ目の検索窓に主格または属格の一・二人称代名詞を入力する。
- ② 単語間の距離を一語として二つ目の検索窓に関係節の述部（各形動詞を意味するタグ）を入力する。
- ③ 単語間の距離を一語として三つ目の検索窓に名詞を意味するタグと主格を意味するタグを入力して検索する。
- ④ ヒットした全ての例文からゴミを手作業で除去して得られた数を主格と属格に分けてそれぞれ合算する。

なお、過去の形動詞 *-Gän* に関してはヒット数が膨大でゴミの手作業除去が困難であるため、最もヒット数の少ない二人称単数に限定して調査する。

三人称主語

- ① 一つ目の検索窓に主格または属格の一般名詞 *keşelär* 「人々」^{xvii} を入力する。
- ② 単語間の距離を一語として二つ目の検索窓以降は一・二人称の調査と同様に入力して調査する。

以上の方法で調査したところ、以下の結果が得られた。

表2：S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型の出現数

		1, 2 人称		3 人称 (<i>keşelär</i>)	
		S-NOM	S-GEN	S-NOM	S-GEN
過去	<i>-yan</i>	1032	282	204	30
現在	<i>-a toryan</i>	523	58	78	2
未来	<i>-ir</i>	23	184	1	7
	<i>-ası</i>	245	111	1	1
	<i>-açaq</i>	71	11	2	2

調査の結果、全体的に見るとタタール語の関係節においては S-NOM H 型の方が出現数が多いが、未来の形動詞 *-(A)r* を述部とする関係節では S-GEN H(-POSS) 型の出現数の方が多いことが分かった。

次に、調査を行う中で動詞 *yarat*, *söy*-「好む」の *-yan* 形 *yarat-qan*, *söy-gän* 「好きな」を述部とする関係節で S-GEN H(-POSS) 型が多く見られたため、それを検証するために以下の方法で追加調査を行った。

一・二人称主語

- ① 一つ目の検索窓に主格または属格の一・二人称代名詞を入力する。
- ② 単語間の距離を一語として二つ目の検索窓に *yarat-qan*, *söy-gän* または、比較のためにある程度用例が得られる自動詞と他動詞の *-yan* 形 (*yaz-yan* 「書いた」、*yäşä-gän* 「住む」) を入力する。
- ③ 単語間の距離を一語として三つ目の検索窓に名詞を意味するタグと主格を意味するタグを入力して検索する。
- ④ ヒットした全例文からゴミを手作業で除去して得られた数を主格と属格に分けてそれぞれ合算する。

三人称主語

- ① 一つ目の検索窓に主格または属格の一般名詞 *keşe* 「人」を入力する。

- ② 単語間の距離を一語として二つ目の検索窓に一・二人称主語の調査と同様の動詞形式を入力する。
- ③ 単語間の距離を一語として三つ目の検索窓に名詞を意味するタグと主格を意味するタグを入力して検索する。
- ④ ヒットした全例文からゴミを手作業で除去して数を求める。

以上の方法で調査したところ、以下の結果が得られた。

表 3：S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型の出現数 (追加調査)

		1, 2 人称		3 人称 (<i>keše</i>)	
		S-NOM	S-GEN	S-NOM	S-GEN
yarat-qan	好きな	238	1047	2	33
söy-gän	好きな	6	153	0	6
<i>yaz-yan</i>	書いた	166	45	9	1
<i>yäšä-gän</i>	住む	327	14	148	17

追加調査の結果、全体的に S-NOM H 型がより一般的である過去の形動詞 *-yan* を述部とする関係節であっても、*yarat-qan*, *söy-gän* 「好きな」が述部である場合は S-GEN H(-POSS) 型の出現頻度の方が高いことが分かった。

次に、インフォーマント調査の結果を述べる。CWT から抽出した S-GEN H(-POSS) 型の関係節を持つ例文と、それらの関係節の構造を S-NOM H 型に変更した例文の容認度を調べた。インフォーマントによると、過去の形動詞 *-yan* を持つ関係節の中で、*yarat-qan* 「好きな」が述部である (15)b は「容認可能」、*yäšä-gän* 「住む」が述部である (16)b は容認不可だという。

過去の形動詞 *-yan*

- (15) 「私の好きな人が私を裏切った。」
- a. [**Min** *yarat-qan*] *keše* *miŋa*
 1SG 好む-PTCP.PST 人 1SG.DAT
xīyānāt it-te.
 裏切り する-PST

- b. [**Minem** *yarat-qan*] *keše-m* *miŋa*
 1SG.GEN 好む-PTCP.PST 人-1SG.POSS 1SG.DAT
xīyānāt it-te.
 裏切り する-PST

- (16) 「私の住んでいる住宅にはジェンネットさんが住んでいる。」

- a. [**Min** *yäšä-gän*] *yort-ta*
 1SG 住む-PTCP.PST 住宅-LOC
jännāt apa tor-a.
 PN さん 住む-PRS
- b. * [**Minem** *yäšä-gän*] *yort-īm-da*
 1SG.GEN 住む-PTCP.PST 住宅-1SG.POSS-LOC
jännāt apa tor-a.
 PN さん 住む-PRS

他の形動詞 (*-ir* 形を除く) を述部とする関係節も、S-NOM H 型に比べて S-GEN H(-POSS) 型の容認度が低いという同様の傾向を示した。例えば、未来の形動詞 *-asī* を述部とする関係節の場合、(17)b は容認不可だという。

未来の形動詞 *-asī*

- (17) 「私が行く村は駅から 1 キロのところにある。」

- a. [**Min** *bar-asī*] *awıl*
 1SG 行く-PTCP.FUTII 村
stancija-dän ber čaqrım-da.
 駅-ABL 一 キロ-LOC
- b. * [**Minem** *bar-asī*] *awıl-īm*
 1SG.GEN 行く-PTCP.FUTII 村-1SG.POSS
stancija-dän ber čaqrım-da.
 駅-ABL 一 キロ-LOC

未来の形動詞 *-ir* 形を持つ関係節に関しては S-GEN H(-POSS) 型の方が一般的であるため、他の形動詞とは逆の方法で調査した。CWT から抽出した S-GEN H(-POSS) 型の関係節を持つ例文 (18)a と、それらを S-NOM H 型の関係節に変えた (18)b の容認度を調べた。調査

の結果、他の形動詞とは異なり、S-NOM H 型の容認度が低いことが分かった。

未来の形動詞 *-ir* 形

(18) 「電話で話すとき、君は話すことが多すぎる。」

- a. *Telefon-nan* *söyläs-kän-dä*
電話-ABL 話す-PTCP.PST-LOC
[*sineŋ* *söylä-r*]
2SG.GEN 話す-PTCP.FUT I
süz-lär-eŋ *yäjäyep* *küp.*
言葉-PL-2SG.POSS 非常に 多い
- b. **Telefon-nan* *söyläs-kän-dä*
電話-ABL 話す-PTCP.PST-LOC
[*sin* *söylä-r*]
2SG 話す-PTCP.FUT I
süz-lär *yäjäyep* *küp.*
言葉-PL 非常に 多い

結果、以下のことが分かった。

- 1) どの形動詞を持つ関係節でも所属人称接辞が現れるものの方が一般的である。
- 2) 属格人称代名詞の種類によって所属人称接辞の出現頻度に差があり、特に一人称複数の所属人称接辞の出現頻度が最も低い。

まず、コーパス調査の結果を述べる。調査方法は以下の通りである。

- ① CWT で、一つ目の検索窓に一・二人称の属格人称代名詞を入力する。
- ② 単語間の距離を一語として二つ目の検索窓にそれぞれの形動詞を意味するタグを入力する。
- ③ 単語間の距離を一語として三つ目の検索窓に名詞を意味するタグと主格を意味するタグを入力し検索、ゴミを手作業で除去する。

2.2.2. S-GEN H(-POSS) 型における所属人称接辞

本節では、S-GEN H(-POSS) 型の関係節における所属人称接辞に関して行った調査の結果を述べる。調査の

なお、三人称の属格主語を持つ関係節において三人称の所属人称接辞は基本的に義務的であるため、三人称は調査対象としなかった。以上の方法で調査したと

表4：属格人称代名詞を持つ関係節における所属人称接辞の出現頻度（形動詞別）

	<i>-yan</i>		<i>-a toryan</i>		<i>-ir</i>		<i>-asī</i>		<i>-ačaq</i>	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし
1SG	1,053	112	24	5	172	12	57	3	6	0
1PL	249	91	23	2	81	19	17	19	0	0
2SG	271	11	2	0	53	0	7	1	1	0
2PL	137	6	2	0	17	4	7	0	4	0
計	1,710	220	51	7	323	35	88	23	11	0

表5：属格人称代名詞を持つ関係節における所属人称接辞の出現頻度（合計）

	所属人称接辞		計
	あり	なし	
1SG	1,312 (90.9)	132 (9.1)	1,444 (100.0)
1PL	370 (73.9)	131 (26.1)	501 (100.0)
2SG	344 (96.6)	12 (3.4)	356 (100.0)
2PL	167 (94.4)	10 (5.6)	177 (100.0)

ころ、以下のような結果が得られた。

調査の結果、どの形動詞を持つ関係節でも所属人称接辞ありの出現頻度の方が高いこと、属格人称代名詞の種類によって所属人称接辞の出現頻度に差があり、特に一人称複数の所属人称接辞の出現頻度が最も低いことが分かった。

次に、所属人称接辞の出現頻度が最も低い一人称複数と最も高い二人称単数で所属人称接辞なしの容認度に差があるのかを検証するために行ったインフォーマント調査の結果を述べる。調査は過去の形動詞 *-yan* と未来の形動詞 *-ir* を持つ例を対象に行った。コーパスから抽出した (19-22)a と、それらから所属人称接辞を削除した (19-22)b を作成し、容認度を調べた。インフォーマントによると、一人称複数が主語である場合、所属人称接辞のないものは「違和感がある」が、二人称単数が主語である場合は、所属人称接辞がないものは「容認不可」とあるという。

過去の形動詞 *-yan*

- (19) 「私たちの好きな街は自身の 230 周年を祝った。」

- a. [Bez-neŋ yarat-qan] šähär-ebez
 1PL-GEN 好む-PTCP.PST 町-1PL.POSS
 üz-e-neŋ 230 yilliy-ı-n
 REFL-3.POSS-GEN 周年-3.POSS-ACC
 bilgelä-p üt-te.
 記念する-CVB 過ぎる-PST
- b. [?][Bez-neŋ yarat-qan] šähär
 1PL-GEN 好む-PTCP.PST 町
 üz-e-neŋ 230 yilliy-ı-n
 REFL-3.POSS-GEN 周年-3.POSS-ACC
 bilgelä-p üt-te.
 記念する-CVB 過ぎる-PST

- (20) 「君の好きな食べ物は何？」

- a. [Sineŋ yarat-qan] riziŋ näsä?
 2SG-GEN 好む-PTCP.PST 料理-2SG.POSS 何

- b. *[Sineŋ yarat-qan] riziŋ näsä?
 2SG-GEN 好む-PTCP.PST 料理 何

未来の形動詞 *-ir* 形

- (21) 「私たちの行く場所が残っていない。」

- a. [Bez-neŋ bar-ir] urın-ıbız
 1PL-GEN 行く-PTCP.FUT I 場所-1PL.POSS
 qal-ma-dı.
 残る-NEG-PST
- b. [?][Bez-neŋ bar-ir] urın
 1PL-GEN 行く-PTCP.FUT I 場所
 qal-ma-dı.
 残る-NEG-PST

- (22) 「君の行く場所は遠くない。」

- a. [Sineŋ bar-ir] jir-eŋ
 2SG-GEN 行く-PTCP.FUT I 場所-2SG.POSS
 yıraq qal-ma-dı.
 遠い 残る-NEG-PST
- b. *[Sineŋ bar-ir] jir
 2SG-GEN 行く-PTCP.FUT I 場所
 yıraq qal-ma-dı.
 遠い 残る-NEG-PST

3. 考察

本節では 3.1 節で主格主語と属格主語、3.2 節で所属人称接辞の有無に関する調査結果の考察を行う。

3.1. S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型

S-NOM H 型と S-GEN H(-POSS) 型のどちらが一般的かに関する調査の結果、タタール語の関係節では全体的に S-NOM H 型の方が一般的であることが分かった。このことは、Schönig (1997: 266) の記述と一致する。Ersen-Rasch (2009) が述べているように、主語の格の選択には情報構造も関わっていると考えられるが、(12), (13) のような反例もあり、それだけでは説

明できない。本稿の調査では、*yarat-qan, söy-gän*「好きな」および未来の形動詞 *-ir* 形が述部である場合は S-GEN H(-POSS) 型の方が一般的であることが明らかになった。これは、*yarat-qan, söy-gän*「好きな」および未来の形動詞 *-ir* がより形容詞的であることの反映である可能性がある。

まず、*yarat-qan, söy-gän*「好きな」についてであるが、これらは形容詞としてこの形で辞書に載っており、ロシア語の訳語は形容詞の *любимый* である^{xviii}。以下のように、*yaratqan* が形容詞として用いられている例も見られる。

- (23) *Yailä-dä äybät ir, bala-lar-ya*
 家族-LOC よい 夫 子供-PL-DAT
yaratqan ätiy, dus-lar-ya išaničli teräk,
 好きな 父 友-PL-DAT 確かな 支え
tamašači ald-ın-da Rayaz bul-ıp
 観客 前-3SG.POSS-LOC PN なる-CVB
qal-uw töp maqsat-ım.
 残る-VN 主な 目標-1SG.POSS
 「家族ではよい夫、子供たちには好きなお父さん、友らには確かな支え、観客の前では（歌手の）ラヤズであることが私の主な目標だ。」

次に *-ir* 形についてであるが、これも同様に *qayna-r* [沸く -PTCPFUT]「熱い」や *onitil-mas* [忘れられる -NEG.PTCPFUT]「忘れられない」など、語彙化して形容詞として辞書に登録されているものが多く見られる。以下のように、形動詞 + 名詞が形容詞 + 名詞と並列されている例も見られる^{xix}。

- (24) *Minem yäšä-r urın-ım,*
 1SG.GEN 生きる-PTCPFUT 場所-1SG.POSS
minem yaqtı yul-ım.
 1SG.GEN 明るい 道-1SG.POSS
 「私の生きる場所、私の輝かしい道。」

(24) において、「私」と「生きる」の間には主述関係が認められるので、「私の生きる場所」は (25)a のような関係節 + 主要部名詞の構造であると考えることができる。しかし、所有名詞句「私の輝かしい道」と並列されていることを考慮すると、(25)b のような所有名詞句の構造になっていると考えることもできる。

- (25) a. [RC minem yäšä-r] urın-ım
 b. minem [NP yäšä-r urın]-ım

よって、関係節 + 主要部名詞なのか所有名詞句なのかを明確に区別することが難しい場合もあり、これらは連続的であるといえる^{xx}。しかし、属格名詞句と主要部名詞との間に所有関係が成り立たない (14) のような例が、*yarat-qan, söy-gän*「好きな」および未来の形動詞 *-ir* 形が述部である場合でも見られる。

- (26) [minem yarat-qan] artist-ım
 1SG.GEN 好む -PTCP PST アーティスト -1SG.POSS
 「私の好きなアーティスト」

さらに、形容詞として語彙化したものが存在するからといって、形動詞 *yarat-qan, söy-gän*「好きな」および未来の形動詞 *-ir* 形が形容詞的であるということにはならない。よって、これらが述部の場合に S-GEN H(-POSS) 型の方が一般的である理由についてはさらなる検討が必要である。

調査で抽出された例を観察した結果、主語の格に影響を与えるその他の形態統語的要因もあることが分かった。例えば、所有名詞句を修飾する関係節では *yarat-qan*「好きな」が述部であっても S-GEN H(-POSS) 型の許容度が落ちる。インフォーマントは (27)b を「違和感がある」、(28)b を「容認不可」と判定した。これは、主要部名詞に既に所有者を示す所属人称接辞が付いている（タタール語では所属人称接辞の連続が許されないため、一方が削除される）ことや、属格名詞句

の連続が好まれないことが関係しているためと考えられる。

所有名詞句を外から修飾する関係節

- (27) a. [sin yarat-qan] miŋ-em
2SG 好む-PTCP.PST ほくろ-1SG.POSS
b. ?[sinen yarat-qan] miŋ-em-en
2SG.GEN 好む-PTCP.PST ほくろ-1SG.POSS=2SG.POSS
「君が好きな私のほくろ」

所有名詞句の N2 を修飾する関係節

- (28) a. Tömän-neŋ [min yarat-qan]
チュメニ-GEN 1SG 好む-PTCP.PST
urın-i
場所-3SG.POSS
b. *Tömän-neŋ [minem yarat-qan]
チュメニ-GEN 1SG.GEN 好む-PTCP.PST
urın-im-i
場所-1SG.POSS-3SG.POSS
「チュメニの(中で)私が好きな場所」

3.2. S-GEN H(-POSS) 型における所属人称接辞

S-GEN H(-POSS) 型の関係節における所属人称接辞の有無に関する調査の結果、以下のことが分かった。

- 1) どの形動詞を持つ関係節でも所属人称接辞を持つ例の出現頻度の方が高い。
- 2) 属格人称代名詞の種類によって所属人称接辞の出現頻度に差があり、特に一人称複数の所属人称接辞の出現頻度が最も低い。

筆者は菱山 (2019) において、タタール語の所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度を調査した。所有名詞句と比較すると、属格人称代名詞を持つ関係節における所属人称接辞の出現頻度は全体的に高めであるが、これは属格人称代名詞と主要部名詞の間に形容詞が一語入った所有名詞句における所属人称接辞の出

現頻度に近いことが分かった。以下、属格人称代名詞を持つ所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度 (表 6) と、限定部と主要部の間に形容詞が一語ある所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度 (表 7) を示す。これらを再掲した表 5 と比較されたい。

表 5: 属格人称代名詞を持つ関係節における所属人称接辞の出現頻度 (再掲)

	所属人称接辞		計
	あり	なし	
1SG	1,312 (90.9)	132 (9.1)	1,444 (100.0)
1PL	370 (73.9)	131 (26.1)	501 (100.0)
2SG	344 (96.6)	12 (3.4)	356 (100.0)
2PL	167 (94.4)	10 (5.6)	177 (100.0)

表 6: 属格人称代名詞を持つ所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度

	所属人称接辞		計
	あり	なし	
1SG	159 (63.6)	91 (36.4)	250 (100.0)
1PL	41 (16.4)	209 (83.6)	250 (100.0)
2SG	199 (79.6)	51 (20.4)	250 (100.0)
2PL	116 (46.4)	134 (53.6)	250 (100.0)

(菱山 2019: 99 をもとに一部改変)

表 7: 限定部と主要部の間に形容詞が一語ある所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度

	所属人称接辞		計
	あり	なし	
1SG	46 (92.0)	4 (8.0)	50 (100.0)
1PL	24 (48.0)	26 (52.0)	50 (100.0)
2SG	46 (92.0)	4 (8.0)	50 (100.0)
2PL	39 (78.0)	11 (22.0)	50 (100.0)

(菱山 2019: 100 をもとに一部改変)

これらのことから、所有名詞句と関係節では、所属人称接辞の機能が異なる (所有名詞句では主に所有者を表し、関係節では述部の主語を表す) にも関わらず、人称・数による所属人称接辞の出現頻度の傾向に大きな違いはないと言える。

所有名詞句と関係節のいずれにおいても、所属人称接辞の出現頻度は一人称複数が最も低いことから、属格人称代名詞の指示対象が複数の場合に所属人称接辞

の出現頻度が低い傾向にあるといえる（二人称複数の代名詞 *sez* は二人称単数の敬称も表しうるが、一人称複数の代名詞 *bez* の指示対象は常に複数）^{xxi}。

4. 結論と今後の課題

本稿では、コーパスを用いた定量的調査により以下の二点を明らかにした。

- 1) タタール語の関係節では全体的に S-NOM H 型の構造の方が一般的であること。
- 2) S-GEN H(-POSS) 型の構造における所属人称接辞の出現頻度は、所有名詞句と同様に一人称複数で最も低いこと。

筆者はこれらの結果に関し、以下の二点を主張した。

- a. 1) が Schönig (1997: 266) の記述と一致すること。
- b. 2) から、タタール語では属格人称代名詞の指示対象が複数である場合に所属人称接辞の出現頻度が低い傾向があること。

調査では、動詞 *yarat-, söy-*「好む」の過去形動詞形 *yarat-qan, söy-gän* や、未来の形動詞 *-ir* 形が述部である場合は S-GEN H(-POSS) 型の構造の方が一般的であることも分かった。本稿では、これが *yarat-qan, söy-gän* 「好きな」および未来の形動詞 *-ir* がより形容詞的であることの反映である可能性を挙げたが、これに関しては先述のように今後も検討が必要である。

その他の課題としては、非動詞述語を述部とする関係節および主要部なし関係節を調査対象外としたこと、コーパス調査において、1) 主部・述部・主要部名詞が隣接している関係節のみを対象としたこと、2) 関係節と主要部名詞からなる名詞句が主語項であるもののみを対象としたこと、3) ヒット数が膨大である場合は対象を一部に限定して調査したこと、4) 三人称の調査が不十分であること、5) 所有文の例を除外できていないこと、インフォーマント調査ではインフォーマントが一人のみであったことなどが挙げられる。これらを解決し、より正確な調査を行う必要がある。さらに今後は他のチュルク諸語に関しても同様の調査を行い比較することで、他のチュルク諸語と比べてタタール語の関係節における主語人称標示のどのような点が特徴的なのかを明らかにすることも必要である。

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	NP	noun phrase	名詞句
ABL	ablative	奪格	PL	plural	複数
ACC	accusative	対格	PN	person name	人名
COP	copula	コピュラ	POSS	possessive	所有
CVB	converb	副動詞	PRF	perfect	完了
DAT	dative	与格	PRS	present	現在
FUT	future	未来	PST	past	過去
GEN	genitive	属格	PTCP	participle	形動詞
IMP	imperative	命令	RC	relative clause	関係節
INF	infinitive	不定形	REFL	reflexive	再帰
LOC	locative	位格	SG	singular	単数
NEG	negative	否定	VN	verbal noun	動名詞
NOM	nominative	主格	-		接辞境界

参考文献

- Abdurahmonov, G'. A. va Sh. Sh. Shoabdurahmonov, A. P. Hojiyev (1975) *O'zbek tili grammatikasi I-tom Morfologiya*. Toshkent: O'zbekiston SSR «Fan» nashriyoti.
- Ersen-Rasch, Margarete I. (2009) *Tatarisch: Lehrbuch für Anfänger und Fortgeschrittene*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Hidaka, Shinsuke (2016) *Is the -ar/-mas Participle a Participle in Uzbek?* Concall-2 handout.
- Schönig, Claus (1997) A new attempt to classify the Turkic languages (2). *Turkic languages* 1, 262-277.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge University Press.
- Xisamova, F. M. (2006) *Tatar tele morfologiyäse*. Qazan: Mäğärif nashriyati.

URL

Tatar | Ethnologue (<https://www.ethnologue.com/language/tat>) [最終閲覧日：2018/8/23]

調査資料

Corpus of Written Tatar (http://corpus.tatfolk.ru/index_tt.php) [最終閲覧日：2019/8/25]

注

- i チュルク諸語に属し、基本語順は SOV。主にロシア連邦タタールスタン共和国やバシコルトスタン共和国で話される。2010 年の全ロシア国勢調査によると話者数は 428 万人 (Ethnologue より要約)。
- ii タタール語の関係節はいわゆる空所型であり、形容詞の修飾などと連続している。そのため「関係節」と呼ぶのに問題があるが、本稿では便宜的にこの用語を使用する。タタール語の関係節には形動詞を述部とするもの以外に、非動詞述語を述部とするものや、主要部名詞なしのものも存在する。しかしこれらは用例が少ないため、本稿では形動詞を述部とするもののみを扱うこととする。
- iii (N1-GEN) N2-POSS または N1-GEN N2(-POSS) の構造 (属格所有構造) をもつ名詞句で、典型的には所有関係を表す。
- iv 関係節は [] で示し、例文中に現れる関係節と主要部名詞からなる名詞句全体は下線で示す。主要部なし関係節は全体を [] で示す。なお、一部の例では名詞節や名詞句も [] で示している。
- v タタール語のラテン文字転写は筆者による。例文中の、ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。
- vi 現在と未来の形動詞は複数存在する。よって、グロスでは *-a toryan* 形を現在の形動詞 II 形 (PTCP.PRSII)、*-ir* 形を未来の形動詞 I 形 (PTCP.FUTI)、*-asir* 形を未来の形動詞 II 形 (PTCP.FUTII)、*-açaq* 形を未来の形動詞 III 形 (PTCP.FUTIII) とする。
- vii ここでの「名称」とは、諸異形態の代表として Xisamova (2006) が用いているものである (例えば *-yan* 形)。以下本文では、それぞれの形動詞を Xisamova (2006) に倣い、その名称で呼ぶ。ただし、*-ir* / *-er* 形に関しては以下便宜上 *-ir* 形とする。
- viii 現在の形動詞の分析的な形式であり、接辞 *-a* / *-ä* (*-iy*, *-iy*) の付いた動詞と、補助的な語である *toryan* によって作られる (Xisamova 2006: 255)。
- ix 形動詞の名詞節主要部としての機能を Xisamova (2006) は動名詞的機能と呼んでいる。これについては名詞節に関する別稿で扱う。
- x 現在の形動詞 *-uwçir* 形は目的語・場所・時間を修飾する機能は持たない (Xisamova 2006: 253-254)。現在の形動詞 *-a toryan* 形は道具を意味する名詞を修飾する機能も持つ (Xisamova 2006: 255)。
- xi 本稿でいうところの H-POSS 型および S-GEN H-POSS 型の構造に当たると考えられる。
- xii タタール語はヴォルガ・ウラル・コーカサスのキプチャク系言語 (Volga-Ural-Caucasus Kipchak: VUC Kipchak) に含まれる (Schönig 1997: 276)。
- xiii 本稿でいうところの S-NOM H 型の構造に当たると考えられる。
- xiv 注意すべき統語構造に所有文が挙げられる。所有文は一見すると、S-GEN H-POSS 型の関係節 + 主要部名詞の構造を持っているように見える。

- (i) **Minem** köt-kän yeget-em bar.
 1SG.GEN 待つ-PTCP.PST 青年-1SG.POSS いる
 「私には待っている男の人がいる。」

しかし、タタール語には英語の *have* にあたる動詞がなく、叙述所有を表す文は所有名詞句 + 存在述語もしくはコピュラ動詞という構造で表される。そのため、(i) は関係節 + 主要部名詞ではなく、(ii) に示すような所有名詞句の構造になっていると考えられる。

- (ii) a. [NP Minem [NP [RC köt-kän] yeget]-em] bar.
 b. [NP Minem [NP [RC köt-kän] yeget-em]=em] bar.
 c. [NP Minem [NP [RC min köt-kän] yeget]-em] bar.

インフォーマントによると、(i) の所有文は文脈によって二通りの解釈が可能である。一つ目は「私には(私を) 待っている男の人がいる」である。この場合、(ii)a のような構造になっていると考えられる。主要部名詞は関係節の主語であり、主要部名詞に付いた所属人称接辞は所有者を表すものである。二つ目は、「私には(私が) 待っている男の人がいる」である。この場合は、(ii)b もしくは (ii)c のような構造になっていると考えられる。(ii)b の場合、主要部名詞に付いた所属人称接辞は関係節の主語を表し、関係節 + 主要部名詞は H-POSS 型の構造をなしている。所有者を表す所属人称接辞は、この言語において所属人称接辞は重複できないという規則によって消去される。(ii)c の場合、主要部名詞に付いた所属人称接辞は所有者を表し、関係節 + 主要部名詞は S-NOM H 型の構造をなしている。よって、一見すると所有文には S-GEN H-POSS 型の構造があるように見えるが、属格名詞句は関係節の主語ではなく所有者であり、含まれている関係節 + 主要部名詞は、主要部名詞が関係節の主語であるもの、もしくは H-POSS 型か S-NOM H 型であると考えられる。

ただし、インフォーマントによると (i) は文脈によっては絶対存在文の解釈（「私が待っている男の人が存在する」）も可能であるという。その場合 (i) は、S-GEN H-POSS 型の関係節 + 主要部名詞と、存在述語からなると分析できる。

- (iii) [NP [RC Minem köt-kän] yeget-em] bar.

このように、S-GEN H-POSS 型の関係節を持つと解釈できる場合もあることから、コーパス調査では所有文の統語構造を持っている例はゴミとして除去していない。

- xv 総語数約3億5600万語（2019年8月25日現在）。マスメディアの記事が60%、文学作品が35%、学術論文が5%を占める。
- xvi 1973年生まれでタタールスタン共和国カザン出身のタタール語母語話者の男性 R.Y. 氏。
- xvii 代名詞や人名ではなく一般名詞を選んだ理由は、三人称主語の格には定・不定が関わっていることが先行研究で指摘されているためである。一般名詞の中でも特に *keşelär* 「人々」を選んだ理由は、いくつか試した名詞の中で比較的多くの用例数が得られたためである。
- xviii 英語でも類似の表現は形容詞 *favorite* によって表現される。
- xix タタール語と同じくチュルク諸語に属するウズベク語では、未来の形動詞 *-(a)r* による語は動詞よりも形容詞に非常に近いという (Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiyev 1975: 514)。Hidaka (2016) は *-(a)r* を形動詞形成接辞ではなく派生接辞であるとしているが、その根拠として、*-(a)r* が生産的ではなく、名詞修飾の際、基本的に副詞や項を保持しないことを挙げている。
- xx コーパス調査では、属格名詞句と形動詞の間に主述関係が認められるものはゴミとして除去していない。
- xxi この仮説は、所有名詞句において所有者が一人（「私」や「君」）である場合に、所属人称接辞が落ちにくいように感じるというインフォーマントの感覚から着想を得たものである。しかし、二人称単数の方が一人称単数よりも所属人称接辞の出現頻度が高めであることは説明できない。また、この仮説を立証するには二人称複数の代名詞が表すものが二人称複数か二人称単数の敬称かで所属人称接辞の出現頻度に差があることを示す必要があるが、同形であるため定量的な調査による検証は困難である。そのため、本稿では可能性を指摘するにとどめておきたい。